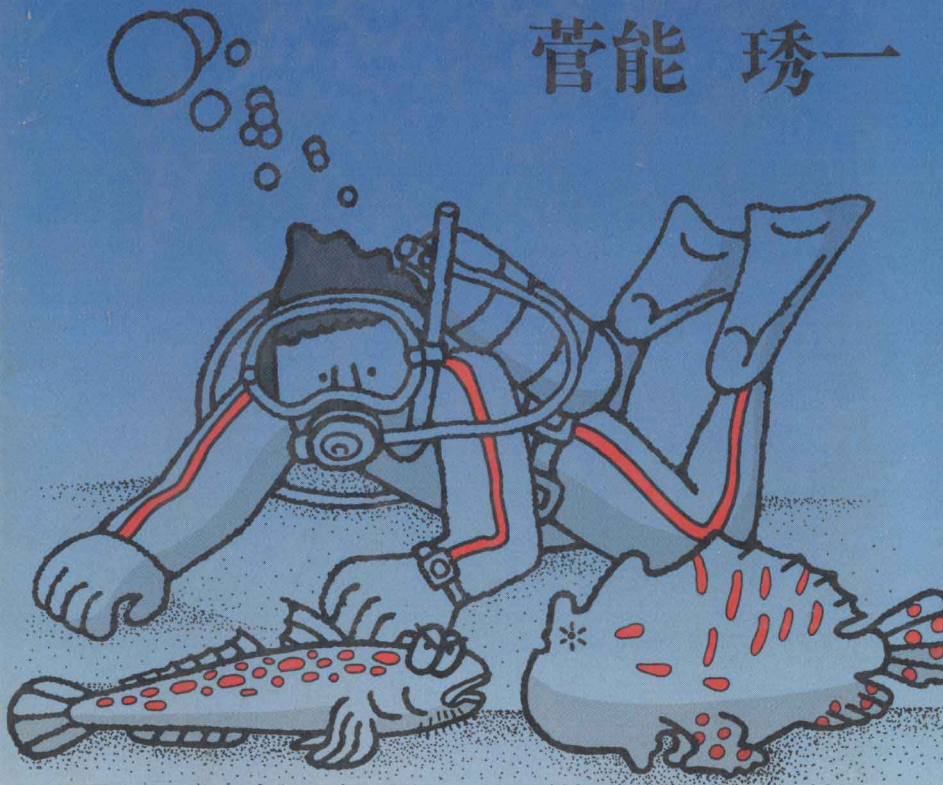
モノドンの
魚心あれば人心

菅能 琇一

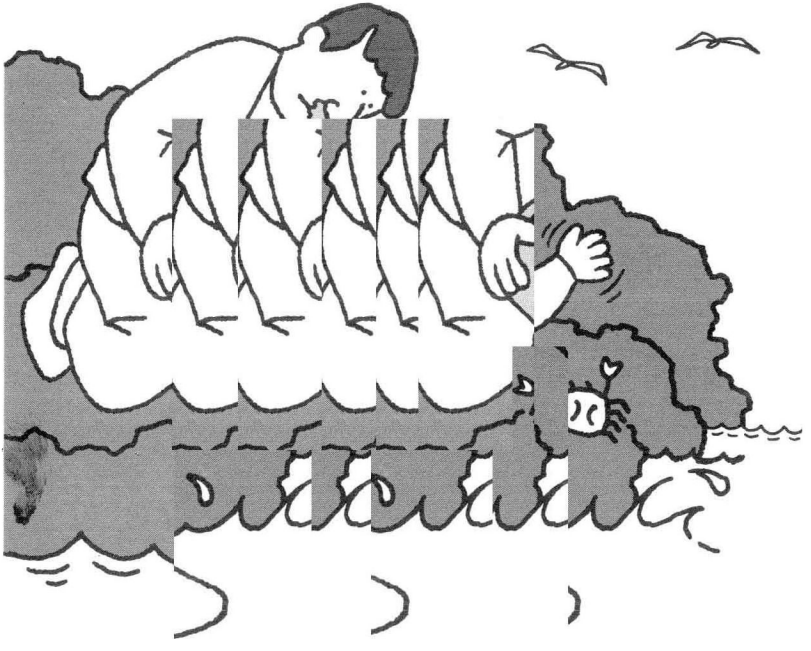


毎日新聞社

モノドンの

魚心あれば人心

菅能琇一



モノドンの魚心あれば人心
定価 七八〇円
昭和五十三年三月十日 印刷
昭和五十三年三月二十日 発行
著者 菅能琇一
編集人 高杉治男
発行人 高原富保
発行所 毎日新聞社
〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇 名古屋市中村区名駅
印刷 東京ベル印刷 製本 正文社
0095-506131-7904

モノドンの魚心あれば人心

目　次

タコ……9
宿命の対決 9　タコの吸い出し 20　オオタコに浅瀬を教えられ 24　墨の効用 31　タコ配当 35
海底のオプチミストたち……41
アンコウの骨休め 41　手袋を食べたアンコウ 45　生きたスポイド 52　魚釣り魚の竿さばき 58　釣り竿は何のため 66　泳ぎを捨てた魚たち 69　魚釣り魚の虚像と実像 74
トゲウオ物語……80

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

会津のトゲッチョ 80　追われる住み家 89
イトヨのことば 89　縄張り争い 104　ついにマイホーム完成 111　誘い入れの儀式 119　猛烈な「アカ」攻撃 130　みんなナチュラリストになろう 137

イシダイ物語……146

初めてのお客 146　素晴らしい感想文 155　卵を求めて白浜へ 164　しまごろうの到着 173
脳ミソしぼって〝しかけ〟を造る 181　タラコが好物 188　しまごろう旅に出る 195　苦心の撮影終わる 202　女房に一本とられた 211　輪

くぐりの調教に成功 222　しまごろう海へ帰る 230
トゲウオ物語・後日譚……235
再会、五年後のトゲッチョたち 235　東京にもトゲウオがいた 242　たった二ミリの恩賜のお菓子 247
あとがき……251

装幀・イラスト／清水良子

モノドンの魚心あれば人心

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

タ　コ

宿命の対決

昨年十一月初め、前作『モノドンのちょっと底まで』が出版され、真新しい本が手元に届いた日だった。

書斎で本に目を通していると、奥の部屋で、テレビのニュースが始まるのが聞こえた。半分そちらに気をとられながら、たまたま、福井の越前海岸の鷹巣でタコ捕りをした話のページにさしかかった時、

「それでは次に、福井県越前海岸で行われている変わったタコ釣りの話題をお届けします」

というアナウンサーの声が聞こえてきた。

私は、あまりの偶然の一致に一瞬狐につままれたような気持になったが、我にかえるとテレビのある居間に駆けこんだ。

画面には、十一月の日本海にしては珍しくべったりと凪いだ海が写し出され、波一つない岩場では、子供たちが、長い竹竿を振りまわしていた。竿には、釣糸も何も、ついていなかった。

「毎年、季節風が吹くころになると荒波の打ち寄せるこの越前海岸にも、一冬に何度か、季節風が止み、うそのように穏やかになる日があります。すると、地元の大人や子供は、待ちかねたように長い竹竿を持って磯にタコ釣りに出かけるのです」

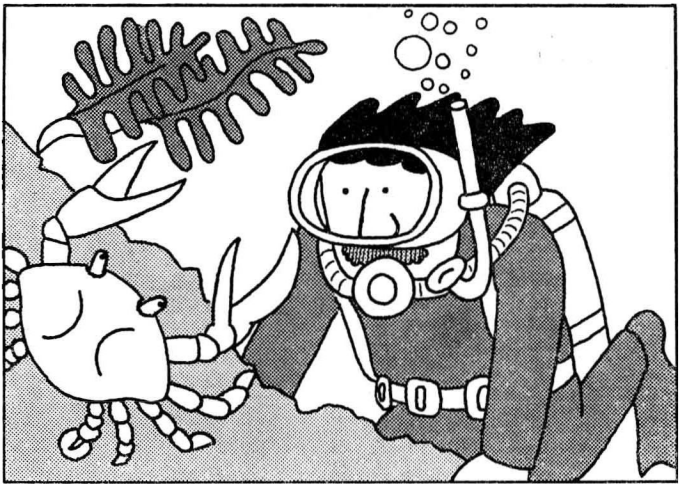
そんな解説だったと思うが、私が興味をひかれたのは釣り方だった。『ちょっと底まで』で、私は、越前海岸の東のはずれにある鷹巣で、木の枝の先にイワガニを吊して海底に立て、穴に隠れたタコを誘い出して釣り上げた話を書いた。まさにそれを読んでいた時に、という偶然だけではなく、私がその場で思いついてやった漁法が、じつはそこで昔から冬に行われていた漁法だったという偶然に驚いた。

画面の中の子供たちは、真夏の日本海のように凪いだ海辺で、石の下に隠れているイワガニを捕え、それを竿の先にしばり付けていた。

「長い時化で、餌もなく腹をすかせて岩穴にひそんでいたタコは、目の前に差し出された好物のカニを見て、夢中で抱きつき、カニごとさっと釣り上げられてしまう、というわけです」

私の漁法との違いは、釣り手が水の中にいたか陸にいたかの差だけであった。

これらの漁法からも明らかなように、タコのカニ好きは、人間の食物への嗜好とは違い、姿を見たらつかみかからないではいられない衝動のように強いものである。



以前、三浦半島の先端に近い三戸浜で潜った時のことである。

岩場が途切れて砂地が広がっている水深七メートルほどのところで、私の姿に驚いたワタリガニが、砂煙をあげてささっ、と横っ飛びに逃げた。甲幅十センチ以上の大きなものだった。

（ばかだな、逃げなければ気がつかないのに）

私は、ことさらつかまえる気もなくただ後を追った。と、しばらく横に逃げたカニは、大きな岩が砂浜を抱き込むように湾曲したところに行き当たり、逃げ場を失った。

とっさに彼は、岩を背にして八本の脚で立ち上がり、自慢の大きなハサミを大きく左右に広げた。ワタリガニが身を守る時の常套手段である。こうすると襲いかかる相手にいつでもはさみかかれるし、体が突然二、三倍に大きくなっ

たように見える。弱点である無防備の甲を岩に当ててかばっているから、まさに完璧な防御体勢である。

以前、こんな状態のワタリガニに無理やり手を出してひどい目にあったことがある。やはり同じくらいの大きさのカニであったが、手づかみにしようとした瞬間、がっ、とはさまれた。軍手の上からだが、軍手の布地などは何の足しにもならない。はさみの先の一番鋭いところが指先に食いこんで、みるみる軍手の先から血が噴き出してきた。

水底で血を見るのは、いやなものだ。赤色ではなく、くすんだ緑色の煙になって、ふわあっと漂い出る。

ふりほどこうとして、もう一方の手をのばすと、その指先を残りのはさみで、がっとはさまれた。こっちに手が二本あるのと同様、向こうだって二本のはさみを持っているのだ。

ただ彼らは、両方のはさみで同時に力いっぱいはさむのは苦手なのか、最初の一方の力がゆるみ、今度は二番目のはさみが、ぶすりと新たな指先を突き破った。また緑色の血が、糸のように立ち昇った。

必死に手を振ると、カニは、一方のはさみを人の指に食い込ませたまま、ぷつんと切り落として逃げ出した。自切と言って、カニがよくやる手段だ。そうやって生き延びさえすれば、やがて新しいはさみがはえてくる。

私は、あまりの痛さに、後を追う気力も失くしていた。

そんな苦い経験があったから、岩を背に完璧な守りをしたワタリガニに、うかつに手を出すわけにもいかず、さてどうしたものかと考えた。つかまえて食べようというつもりはなかったが、何とかこの守りを崩してみたいと思ったからだ。

（何か棒のようなものがないかな）

見渡す範囲にはなかったので、その場を一時離れることにした。その前に、彼が逃げてしまわないように、左右を取り囲むように大きな石を並べておいた。彼と言ったのには訳がある。はさみをふりかざして立ち上がった股間から、きりっと逆V字に切れこんだふんどしが見えていたからだ。これがメスだと、半円を描いたブルマが見えるところだ。

カニが背にしている岩は、かなりの急角度で水面まで延びていて、中腹から上は、カジメの林になっていた。

カジメは、直径四、五センチの太い幹がまっすぐに一、二メートル伸び、その先に数枚の葉状体がついている。幹を切れば棒代わりになる。そう思って、岩の斜面を少し上がりかけた時、おやっ、と思った。

目の前で、何か金色のものが光ったような気がしたからだ。

そのあたりは、カジメの林の日陰になって暗く、おまけに岩が深くえぐれていた。光ったのは、その奥の方だった。

あらためて目をこらすと、金色の光は二つあった。二つの金色は、その真ん中に四角く黒い部

分があった。

タコの目だった。目と目の間隔から察して、マダコの中では、まあまあ中位の大きさである。こちらが彼の光る目に気づいたということは、すでに彼の方も気づいているということだった。その証拠に、早くも防御姿勢をとっていた。

体中の皮膚を棘のようにささくれ立たせ、体色を目立たぬ暗褐色にし、頭を中心に八本の腕先を丸めて、くぼみの壁にそれ以上平らにはりつけないと思われるほどぴたっと身を寄せている。マダコは、こちらがそれ以上近づいたり攻撃したりしなければ、しばらくはそのままでいるだろう。

（そうだ。こいつは面白いことになったぞ）

私は一人で、にやりとした。

（またとないチャンスだ。こいつとあのワタリガニを対決させてみよう）

そこで私は考えた。どっちをどっちに連れて行くかが問題だ。

タコをつかまえてカニの所へ連れて行ったらどうだろう。おそらく私がタコにつかみかかり、岩からはがしておとなしくさせるまでには、大分手間がかかるだろう。おとなしくなった時は、タコは戦う気力も失くしてしまっているだろう。

カニはどうか。カニをカジメの棒でおさえつけ、甲羅の後ろをつかめさえすれば、はさみを振り上げて意気軒昂なまま、タコの方に連れて行ける。よし、それでいこう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com